



The Kyushu University Museum

NEWS

九州大学総合研究博物館ニュース

n°
29



吉川幸作《工学部2号館裏通り》制作年不詳 九州大学大学文書館所蔵

March
2018

「ありがとう箱崎キャンパス — 学術遺産と学者たち —」 展示が始まりました

2005年から始まった九州大学メインキャンパスの移転プロジェクト。

いよいよ今年、一大事業は完了します。100年の歴史を刻んできた箱崎キャンパス。

すでに写真展は図書館で開かれています。

総合研究博物館では先達の教育・研究活動を学術資料とともにシリーズで展示します。

ご来場をお待ちしております。

総合研究博物館第8代館長
緒方 一夫



催事・展示クローズアップ

I 平成29年度九州大学総合研究博物館共催展示(「ありがとう箱崎キャンパス」シリーズI) 文学部AQAプロジェクト2017が企画した 「そして はこぶねは ゆく」展

担当: 後小路 雅弘 九州大学大学院人文科学研究院・教授

「そして はこぶねは ゆく -AQAプロジェクト2017-」展

期間: 2017年12月15日(金)~2018年2月14日(水)

場所: 旧工学部本館3階総合研究博物館常設展示室

主催: AQAプロジェクト2017

共催: 九州大学総合研究博物館・九州大学大学文書館 協力: 農学研究院

青山熊治(九大工学部壁画)1907年を特別公開(1月27日、2月3日)

私が担当する九州大学文学部の授業(美学・美術史実習)の一環として、九州大学が所蔵する美術作品について、細々とではあるが、調査を続けてきた。昨年度、その成果を、福岡県立美術館や九州大学総合研究博物館などの協力を得て、「九大百年 美術をめぐる物語」という展覧会に示すことができた。



会場 第1章

一方、私は、前職が美術館学芸員であったこともあり、その経験を活かし、研究教育と社会貢献が有機的に結合するような活動を目指してきた。同時に学芸員の育成を実践的に行うことを目的として、AQAプロジェクトを立ち上げ、実践してきた。授業の中で、学生たちが実際にアジアの現代美術展を、美術館など公的な会場を借りて、

企画実施するというものがある。

今年度のAQAプロジェクトは、「九大百年 美術をめぐる物語」展の成果を踏まえ、九州大学所蔵品を用いて、



展示作業中の学生たち

総合研究博物館の常設展示の一角を会場に、小さな三つの展覧会を積み重ねる3部構成で、行った。

タイトルは、「そして はこぶねは ゆく」というもので、「はこぶね」には、聖書の「ノア方舟」と「箱崎という船」の二重の含意がある。いまキャンパスの最終的な移転が迫り、「方舟」に「箱崎という船」からなにを選んで、なにを積んで未来へ渡すのか、という問題意識で展覧会を構成するに至った。

大学所蔵の美術作品には、そもそも純粋に「美術」といえるものは少ない。たくさんある肖像画や肖像彫刻は、像主の遺徳をしのび、学恩に思いをはせ、自らの学問への思いを新たにするためのものであろう。今回展示した植物図などは、たとえそれがどんなに「美術」らしく見えたとしても、「美術」として描かれたわけではなく、あくまで、植物標本として「科学的に」描かれたものだ。つまり、大学所蔵美術品は、それ自体「美術」として自律するものではなく、大学の日常的な学問的営為の延長線上にあり、その背後には学問の蓄積があるのである。

もとより、未熟な学生たちに、そのような学の体系やその重みが、作品を通して十全に理解、あるいは感得できたとは思わない。しかし、普段、美術館で見慣れた「美術のための美術」や「美術であることが自明の美術」ではなく、自分たち自身で、なにが美術か考えながら選ぶ作業は、学生たちに「美術」が大学の中で生きる文脈について考えさせるきっかけにはなったのではないだろうか。

Close-up Event & Exhibition

II 「ありがとう箱崎キャンパス」シリーズ展示のご案内

主担当: 岩永省三 一次資料研究系・教授 副担当: 三島美佐子 開示研究系・准教授

場所: 旧工学部本館3階総合研究博物館常設展示室

2018年9月に箱崎キャンパスから全部局が移転し終わるのを記念し、箱崎キャンパスで展開された教育・研究活動と学術資料を、その形成に関わった学者たちの活動などとともに振り返ります。先のAQAプロジェクトによるはこぶね展を含むシリーズ展示として、旧工学部本館3階の常設展示室内ミニ企画展示コーナーで開催。10月以降には、旧工学部本館全体を取蔵展示化したような企画展示や資料移転完了記念バックヤードツアーを計画しています。

3月上旬～4月下旬

「戦前の福岡における博物研究の興隆と九州大学」

九州帝国大学の発足を契機に、福岡では博物研究が興隆しました。歴史的なX線管、南洋で採集された魚類標本などを展示予定。

5月上旬～7月中旬

「防塁再発見 ～慧眼の士・中山平次郎先生の足跡」

移転調査で元寇防塁の遺構が発見されました。出土した元船の礎、中山平次郎による推定図などとともに、発掘で明らかになった新事実なども紹介します。

8月ごろ～10月

「ありがとう箱崎—私のなかの箱崎キャンパス(仮題)」

箱崎キャンパスにからむ写真やゆかりの品々をとおして、箱崎での日々を振り返ります。※現在、箱崎キャンパスにまつわるエピソードや写真を募集中。

11月ごろ～

「九州大学の鉱物鉱石(仮題)」

本学創設時以来の資料の1つである鉱物鉱石標本コレクション。その収集背景や、関連する資源学的資料を紹介しします。

COLUMN 博物館の活動

博物館での理科教育教員研修

川原 恵子 県立高等学校・教諭(理科)



川原恵子先生

私は、今年度九州大学総合研究博物館の丸山宗利先生のもとで研修をさせていただいた高校の教員です。研修のテーマは「海岸性ハネカクシを主体とした甲虫調査」。今回の研修で、ハネカクシという甲虫を初めて知りました。とても小さなもの(1.5~3.0mm程度)が多く、私が同定に初挑戦したときに、先生が「こっちの小さ

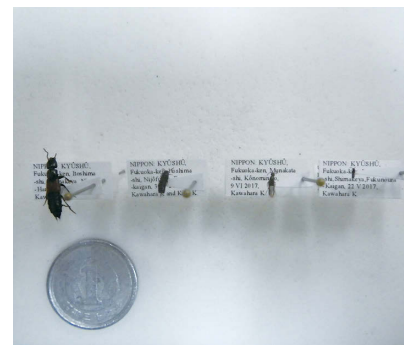
いのは〇〇で、大きいのは△△と説明されたときは、心の中で「どれも小さく見える、困った…」と思いました。顕微鏡を覗き続けた今では、3mmを大きいと表現される先生の感覚が少しわかるようになりました。ですが、「昨日はこの種類に見えたけど、今日は違う?」の繰り返しで、同じものを何度も観察し、研鑽を積む日々です。高校に戻った時、生徒と一緒に調査を続けるのも楽しいだろうと考えています。

また、常設展示室や図書館の展示コーナーを知り、毎回の企画も堪能しています。宝石のような昆虫のこと、人骨から年齢を推定できること、偽物だと思っていた私物のアンモナイト

化石が本物だったこと等々、はやく生徒に(自慢げに)話したいです。

今回の研修では丸山先生をはじめ、多くの方々にお世話になりました。この場をお借りして、御礼申し上げます。

今回の研修では丸山先生をはじめ、多くの方々にお世話になりました。この場をお借りして、御礼申し上げます。



ハネカクシ。左端の大きいもので、10mm程度。

Close-up Event & Exhibition

催事・展示クローズアップ

III 標本に見る九州大学の研究

玉泉大梁先生の集めた玉泉館資料

米元 史織 開示研究系・助教 梶嶋 政司 記録資料館九州文化史資料部門・助教 和仁 かや 法学研究院・准教授 岩永 省三 一次資料研究系・教授

シリーズ展示「標本に見る九州大学の研究」第10弾「玉泉館資料」

期間：2017年11月7日(火)～2018年3月26日(月)

場所：中央図書館2Fエントランス 常設展示コーナー

九州大学箱崎キャンパスの中央図書館2階エントランスにある常設展示コーナーでは、「標本に見る九州大学の研究」と題したシリーズ展示を行っています。11月から3月まで総合研究博物館と記録資料館九州文化史資料部門、法学研究院と共催で「玉泉館資料」の展示を行いました。

玉泉館は、旧制福岡高等学校(旧・九州大学教養部の前身)教授であった玉泉大梁先生(1886-1971)が、実物資料を用いた教育・研究を重視し、考古資料6000点、古文書4000点を収集し、整理、陳列する施設として昭和5年3月に福岡高等学校敷地内に開設されました。現在これらの資料は「玉泉館資料」と称され、総合研究博物館および記録資料館九州文化史資料部門に収められています。



鐔と十手と藩札



玉泉館の看板とともに

第一弾では、江戸時代の鏡、鐔、十手、藩札、その他に近代の軍票を取り上げました。第2弾では記録資料館九州文化史資料部門に保存されている江戸時代から明治期

にかけての箱崎村関係史料の中から地藏松原の落葉をテーマとした史料を展示しました。そして第3弾では、玉泉大梁先生の写真とともに、玉泉館資料の一部である江藤正澄旧蔵資料

を展示しました。江藤正澄(1836-1911)は明治時代の福岡を代表する国学者ですが、好古家として古物の蒐集や遺跡の調査記録を精力的に行ったことでも知られ、近年では特に沖ノ島研究の先駆者として改めて注目されています。

これら3回の展示を通して、先人達が多くの資料・史料を収集し、これらを用いた歴史教育を通じて未来に何を伝えようとしていたのかを窺うことができればと思います。そして、今も数多くの人達が保存に尽力している重要な資料・史料に興味を持っていただければと願っています。

COLUMN 博物館の活動

「きらめく甲虫2」展を開催しました

担当：丸山 宗利 一次資料研究系・准教授

これまでに当館の特別展示(小規模なもの)として、10回近くの昆虫に関する展示を行ってきましたが、そのなかでもっとも好評を博したのが2015年の夏に開催した「きらめく甲虫」展でした。

今回、三菱地所アルティウムで開催した「密やかな部屋ーきらめく昆虫標本ー」のプレ展示としまして、その第2弾を開催しました。パネルを一新し、標本への光の当て方を工夫し、さらに甲虫たち

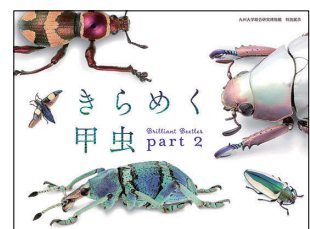
特別展示「きらめく甲虫 Brilliant Beetles part 2」

期間：2017年11月13日(月)～12月13日(水)

場所：旧工学部本館3階総合研究博物館常設展示室

のきらめきを楽しんでいただけるものとなりました。

アルティウムでの展示については、次号のニュースで詳しく解説いたします。



チラシ画像 デザイン：大村政之

New Assistant Professor

新助教着任

新任教員による着任のご挨拶と研究紹介

着任の抱負

伊藤 泰弘 開示研究系・助教 専門：古生物学



伊藤泰弘 助教

私は、昨年12月に開示研究系の助教として着任しました。専門は、地質学・古生物学です。ニオガイ類という、岩など硬いものに自ら穴を穿ってその中で生活する二枚貝の研究で、京都大学大学院理学研究科地質学鉱物学専攻にて博士号を取得しました。ここ十数年は、東京大学総合研究博物館に所属し、古生物標本のキュレーティングに携わってまいりました。また、標本情報のデジタル化やデータベース化については、専門の古生物だけでなく、植物、昆虫、水生無脊椎動物のインターネット公開などを手がけておりました。現在の主要なテーマは、日本国内にある古生物標本の所蔵情報に関する大学・博物館・資料館等のネットワークを構築することです。

博物館のキュレーティングという仕事は、多くの労力や時間を要する割に、表向きの成果はあまり見えてこない裏方(バックヤード)の地味なものです。華々しい展示に人々の注目が集まるのとは対照的です。しかし、所蔵標本が研究や教育に活用されるためには、それらがよく整理され、きちんと管理されていなければなりません。バックヤードこそが博物館の根幹であると考え、日の当たる表側とは正反対に、標本管理人は日陰者であることを良しとしてきました。ですが一方で、博物館の所蔵標本・資料は、その情報が表に出て行かなければ、誰もその存在を知ることができません。標本情報や画像を積極的に発信していけば、研究や教育に再利用される機会も増え、活性化していくのではないかと思います。バックヤードにも光が当たるかもしれません。そのような考えから、私は、これまでデジタル化やデータベース化、その公開に主体的に取り組んでまいりました。

今後、九州大学におきましては、まずは担当する地質学・古生物学分野の標本を整備します。そして、すでにある九大標本の特徴を生かしながら、さらに標本や情報を戦略的に集積していく研究拠点にしていきたいと考えております。また、博物館の公開データベースを再構築し、画像や関連資料のデジタル化を推進してまいります。そして、研究・教育やキュレーティングにも活用できるよう開発を進めるとともに、様々な分野の情報を横断・融合した新しい研究へと発展させていきたいと考えております。

ただ、このような構想には、博物館の現状に鑑みると厳しいものがあります。ですが、災い転じて福となす。ガラガラポン。今をチャンスと捉え、他にはない九大モデルとして、大学の標本・資料情報を発信・創出する研究基盤の構築を目指します。



展示も手がけました：東大古生物学130年の軌跡



展示の準備は楽しい



バックヤードに光を：東大標本室



標本を大切に：神保(1894)記載標本

Series : Research at the Kyushu University Museum

シリーズ・九大博物館での研究の紹介

九州大学の削岩機コレクション

工学部列品室の鉱山技術史資料紹介—第1弾—

中西 哲也 分析技術開発系・准教授 専門: 鉱床学、鉱山技術史

九州大学箱崎キャンパスの旧工学部本館3階東側には、1911年の九州帝国大学工科大学発足時に設置された6学科の内、採鉱学科及び冶金学科の関連標本を収蔵する列品室があります。収蔵品の主な概要は、鉱物・岩石標本約4000点、古式鉱山用具29点、明治～昭和初期鉱山用具約150点、採鉱・冶金関連模型43点、高島炭鉱模型1点、転炉1基、金属製錬原料434点、製錬中間・最終製品202点、金属加工中間品・製品30組であり、日本の鉱山技術史上貴重なコレクションです。

この内、明治～昭和初期の鉱山用具には32点の削岩機コレクションが含まれます(写真1)。削岩機は炭鉱や金属鉱山での石炭・鉱石の採掘に使われた道具であり、明治初期の採鉱技術の近代化により海外から導入されました。近代化以前の採鉱が、セットウ(ハンマー)と鑿(たがね)による人力で行われていたのに対し、削岩機と火薬を用いた発破採掘法は、採掘の効率を飛躍的に高め

ました。鉱山技術の近代化のために明治政府が招聘した“お雇い外国人”技術者の指導のもと、明治元年には佐渡鉱山(新潟県)で黒色火薬が用いられ、明治13年には生野鉱山(兵庫県)や別子銅山(愛媛県)でダイナマイトが使用されました。削岩機は、明治14年に吉岡鉱山(岡山県)及び佐渡鉱山に初めて導入されています。

削岩機には大きく二つの異なる方式があります。一つは衝撃式(ピストン式)と呼ばれるもので、鑿がピストンと一体化した構造を持ちます。これに対し、後に開発された打撃式(ハンマー式)削岩機では、鑿とピストンを分離し、ピストンを早く往復させ鑿の頭を叩くことで開削効率を上げています。動力は圧縮空気式と電気式があります。

列品室の削岩機コレクションで最も古いものは、デマーク型衝撃式穿孔機であり、明治30年以前のもので、大型の据え置き式で三脚台に乗せて使用しました(写真2)。



写真1) 列品室の削岩機コレクション



写真2) デマーク型衝撃式穿孔機



写真3) ウォーターライナー 5番型ハンマー式削岩機



写真4) 足尾10番型削岩機

Event & Exhibition Info.

催事予告

ありがとう箱崎キャンパス — 学術遺産と学者たち —

福岡市ミュージアムウィーク2018関連特別展示・開学記念行事

防塁再発見^{けいがん}～慧眼の士・中山平次郎先生の足跡～

期間：2018年5月12日(土)～20日(日)

会場：旧工学部本館3階総合研究博物館常設展示室

明治31年には、米国インガースル社がハンマー式削岩機を改良し、破碎した岩石の粉を排除するために水圧を用い、鑿の回転機構を組み込んだウォーターライナー式(湿式)削岩機を発明しました。これは現在の削岩機の原型となっています。明治36年には更に改良を加えたウォーターライナー5番型ハンマー式削岩機(写真3)が開発され、明治40年には足尾銅山(栃木県)に、5番型が10台輸入されています。列品室には、明治43年に足尾で使われたウォーターライナー7番C型削岩機も展示されています。

大型の削岩機としては、他に明治43年に三池炭鉱で使われたサリバン型コールパンチャー(衝撃式)や、電気式削岩機として中山式削岩機M23(衝撃式、大正13年)があります。電気式削岩機は、日本では大正7年に発明されましたが、構造が複雑で重量もあり、大きく普及するには至りませんでした。

一方、大型の削岩機は穿孔能力には優れていたものの、設備投資や維持修理費用、切羽での移動や据え付けに労力がかかるため、手持ち式の小型のものが開発されました。列品室には、ホルマン式ドリル(明治37年)、リットルワンダードリル(明治39年)、インガースルランドBCR430型ジャックハンマードリル(明治45年)、足尾10番型削岩機(大正5年、写真4)、ムードンP38型コールピック(昭和4年)フロットマンCA型コールピック(昭和9年)等が展示されています。また、明治45年にドイツのジーメンス社が開発した小型の電気ドリル(回転式穿孔機)は、炭鉱などの柔らかい岩質に適し、日本の多くの炭鉱で採用されました。しかし、昭和10年台には炭鉱火災の問題が大きくなり、昭和20年台には圧縮空気式のオーガードリルに取って代わられます。列品室にはウエストファリア型エアオーガードリル(昭和4年)が残っています。



発見された元寇防塁

九州帝国大学医学部教授で考古学者の中山平次郎は、大正初期に大学キャンパス内の現地踏査を行い、元寇防塁の位置を推定しました。その105年後の発掘調査で防塁が発見され、中山の正しさが検証されました。新事実や出土品を紹介します。

5/12(土) ◎開学記念行事 博物館関連全施設一般公開

本館：4階会議室、3階常設展示室・列品室

第3分館：動物骨格標本室、貴重地質・鉱物標本室

◎地質の日記念企画

前田晴良教授による解説【化石化のメカニズムを探る】

時間：10:00～/11:30～/13:30～/15:00～(毎回約30分)

5/13(日)・19(土)・20(日) ◎博物館関連施設特別公開

本館：3階常設展示室

第3分館：動物骨格標本室、貴重地質・鉱物標本室

特典

ミュージアムウィーク期間中の来場者には来場者特典あり! <



Activities of Exhibitions & Conferences

展示・講演会関係の活動状況

特別展示

- 「きらめく甲虫 Brilliant Beetles part 2」
期間:平成29年11月13日(月)～12月13日(水)
場所:九州大学箱崎キャンパス旧工学部本館3階常設展示室
主催:九州大学総合研究博物館
共催:三菱地所アルティム
協力:(株)幻冬舎

共催展示

- 「そしてはこぶねはゆく -AQAプロジェクト2017-」
期間:平成29年12月15日(金)～平成30年2月14日(水)
第1章 12月15日～1月10日
第2章 1月12日～1月24日
第3章 1月26日～2月14日
主催:AQAプロジェクト2017
共催:九州大学総合研究博物館・九州大学大学図書館
- 「密やかな部屋 一きらく昆虫標本 -
WORLD OF INSECT SPECIMENS」
期間:平成30年1月20日(土)～3月11日(日)
場所:三菱地所アルティム
主催:三菱地所・三菱地所アルティム・西日本新聞社
共催:九州大学総合研究博物館
監修:丸山宗利(九州大学総合研究博物館)
協力:(株)幻冬舎・織田廣喜美術館
後援:福岡市・(公財)福岡市文化芸術振興財団

学内連携事業

- 中央図書館シリーズ展示-標本にみる九州大学の研究-
第9弾「九州大学の骨格標本」
期間:平成29年7月10日(月)～11月7日(火)
第10弾「玉泉館資料」
期間:平成29年11月7日(火)～平成30年3月26日(月)(予定)
場所:中央図書館(箱崎)2階エントランス常設展示コーナー

ラジオ出演

- NHKラジオ第一放送とNHKワールド・ラジオ日本
「NHKラジオ冬休み子ども科学電話相談」
(丸山宗利 准教授)
平成30年1月4日(木)、5日(金)

サテライト巡回展示

- 福岡県の蝶9
期間:平成28年3月17日(金)～継続中
場所:糸島市図書館二文庫

出張展示

- 「笹丘小ミュージアム」
二学期のテーマ 生き物と多様性(昆虫)
期間:平成29年10月28日(土)～平成30年1月9日(火)
三学期のテーマ 地球と宇宙からの贈り物(化石)
期間:平成30年1月9日(火)～年度内継続予定
場所:福岡市立笹丘小学校

講演

- 箕面公園昆虫館 リニューアル記念講演会
「きらめく虫博士の 昆・虫・探・検・記」
(丸山宗利 准教授)
期間:平成29年7月25日(火)
場所:箕面市立メイプルホール小ホール
主催:箕面公園昆虫館
- 企画展『生き物たちの仮装パーティー～擬態のふしぎ～』
関連イベント特別講演会「変わった昆虫 綺麗な昆虫」
(丸山宗利 准教授)
期間:平成29年12月23日(土)
場所:佐賀県立宇宙科学館
主催:佐賀県立宇宙科学館

Personnel Changes

人事往来

着任・退職

平成29年11月30日付けで、
開示研究系・助教の松本隆史が
転出しました。

平成29年12月1日付けで、
伊藤泰弘が開示研究系・助教として
着任しました。(本誌p.5参照)

事務補佐員の鶴岡圭子は、
平成29年12月31日限りで
退職しました。

専門研究員

新井 竜治 平成29年11月1日～

Others

その他の活動状況

運営委員会

平成29年10月17日
平成29年12月11日
平成30年 2月 8日(書面回議)

団体見学

平成29年10月21日(土) キッズ・ミュージアム・スクール 13名
平成29年11月 7日(火) 静岡県立垂山高等学校 45名
平成29年11月14日(火) 感謝の集い(同窓生・基金課) 13名
平成29年11月16日(木) 宮崎県翔翔中学校 56名
平成29年11月18日(土) 工学部生産機械学科同窓会 15名
平成29年11月29日(水) 糸島市志摩新町老人会 21名
平成29年12月 1日(金) 南京大学博物館 6名
平成30年 2月 5日(月) モンゴル国立科学技術大学付属高専 3名
平成30年 2月 7日(水) 台湾大学医学院 10名

総合研究博物館 ウェブコンテンツの紹介

九州大学総合研究博物館
では、公式ウェブサイトの他にも、
様々なウェブサービスを活用
して最新情報やコンテンツを
発信しています。ぜひアクセス
してみてください。

- 公式HP <http://www.museum.kyushu-u.ac.jp>
- Facebook
日本語 [facebook.com/KyudaiMuseum](https://www.facebook.com/KyudaiMuseum)
英語 [facebook.com/TheKyushuUniversityMuseum](https://www.facebook.com/TheKyushuUniversityMuseum)
- Twitter twitter.com/Kyudai_Museum
- Vimeo vimeo.com/KyudaiMuseum
- Flickr [flickr.com/KyudaiMuseum](https://www.flickr.com/photos/KyudaiMuseum/)

※本誌の内容、およびバックナンバーは本館ウェブサイトの「出版物・教材」からもご覧いただけます。